

保育者と乳幼児のかかわり方を記述する様相モデルの提案 ～ Vasudevi Reddy の人称的かかわりを援用して ～

佐々木 郁子 (現代教育研究所研究員)

1 研究の背景及び目的と方法

(1) 保育者による乳幼児期の子ども理解の在り方とかかわり方の必要性

人間の発達という、長く複雑な事象において、安定した人間性を育むことが望まれる。特に、乳幼児期には、その基盤が形成されることから、乳幼児期は人間の発達において、最も重要な時期であるといえる。さらに、乳幼児は1日の中で保育者とかかわる時間が長いことから、乳幼児と保育者のかかわりが大切であることは論を俟たない。

平成29年に告示された保育所保育指針の第1章総則第1(2)にある「保育の目標」には「人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てるとともに…」と記述されている。また、保育所保育指針の第1章総則第2(2)にある「養護に関するねらい及び内容」には、イ情緒の安定(イ)②に「一人一人の子どもの気持ちを受容し、共感しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく」、同③に「保育者等との信頼関係を基盤に、一人一人の子どもが主体的に活動し、自発性や探索意欲などを高めるとともに、自分への自信をもつことができるよう成長の過程を見守り、適切に働きかける」と記述されている。これらの事柄には、乳幼児と保育者のかかわり方が大きく影響するといえる。それは、1日の生活の中で、保育園で生活する時間が長いことから、他の乳幼児や保育者とかかわることが多いからである。また、大宮(2006)が「保育の質は保育者と子どもとの関係の質を中心とした日常的な人間関係や、保育者の子どもへの働きかけの繰り返しそのものの中にあると言える」と述べているように、保育所保育指針で述べられている上記の内容の実現には、子ども(乳幼児)と保育者の関係性が密接に関わってくるといえる。したがって、保育現場において、子どもの望ましい育ちを保障するためには、保育者による一人一人の子どもに対する理解の在り様とかかわり方が重要であるといえる。

(2) 保育者と子どものかかわりに関する問題

保育者は子ども、保護者、他の保育者などとかかわりながら保育を行うが、様々な問題も指摘されている。例えば、保育者どうしのかかわりの問題として、山村(2015)は、子どもや保護者の多様なニーズに対応していくために保育者同士が協力関係を構築することの難しさを指摘している。

また、保護者とかかわりの問題として、保護者からの保育者に対する意見や要求に対して、誠実に対応しているにもかかわらず上手く伝わらないという不安や葛藤を指摘する原口(2016)の研究や、保護者とかかわることの少ない保育学生が保護者に対して抱く不安感に関する森下・佐々木(2017)の研究もある。

子どもとかかわりの問題として、原口(2016)は、対応の難しい子どもにより保育者の思うように保育が進められず、子ども達の中でかかわる機会の偏りが起こってしまうと指摘している。

また、保育者が忙しくてゆとりがないことも報告されている。永瀬ら（2004）が行った保育者に対する調査において、「クラスの保育に力を十分注ぎ入れられないぐらい、今の時点で忙しい、病欠や体調不良も多くなっている」や「精神的にも体力的にも疲れが残っていたら笑顔で子どもに接するのは無理」などといった回答が得られている。

さらに、近年は保育者には乳幼児とのかかわりだけではなく、保護者支援など、多様な専門性が求められている。専門性を高めるために保育者を対象とした研究会や研修会等が行われ、保育現場においても様々な取り組みや省察が行われるようになった。一方、そのような状況下において、保育者は多忙になり、本来ならばもっとも大切にされなければならない乳幼児との深いかかわりを持つことが難しくなっている。

このように、保育者は他者とのかかわる場合にさまざまな問題を抱えていることになる。その中で、本研究では、保育者と乳幼児とのかかわり方を対象とする。それは、人間関係の発達を基盤をつくるのは乳幼児期であり、保育者は乳幼児期の子どもと時間的・精神的なかかわりをもつ機会が多いと考えるからである。

(3) 保育者と乳幼児のかかわり方について

保育の質を高めるには、まずは多忙で様々なことが要求される現場において、乳幼児との深いかかわりを志向した保育を行うことが大切であると考えられる。一方、筆者の保育現場における経験から、保育者が乳幼児と深くかかわれていない原因は、多忙さだけではなく、保育者が乳幼児とどのようにかかわろうとしているかにもあるのではないかと考える。保育者と乳幼児とのかかわりを捉えようとする場合、Iram Siraj et al. (2015) による SSTEW スケール (Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being) や、Thelma Harms et al. (2017) による ITERS-3 (Infant/Toddler Environment Rating Scale (Third Ed)) などの評価スケールがよく知られている。その一方で、保育実践を、これらのような「理論」や「方法」で捉えるのではなく「現象」からはじめるべきであるという主張もある。保育者と乳幼児のかかわり方に限定した研究ではないが、発達心理学者である Vasudevi Reddy は、人のかかわり方を一人称的かかわりから三人称的かかわりまでの三つに分類している (佐伯, 2017)。

●一人称的かかわり (first-person engagement)

対象を「ワタシ」と同じような存在とみなす。「ワタシならどうする」を対象に当てはめる。

●二人称的かかわり (second-person engagement)

対象を「ワタシ」と切り離さない、個人的関係にあるものとして親密にかかわる存在とみなす。対象と情動を含んだかかわりを持ち、固有の名前をもつ対象、対象自身が「どのようにあろうとしているか」を聴き取ろうとする。

●三人称的かかわり (third-person engagement)

対象を「ワタシ」と切り離して、個人的関係のないものとして、個人と無関係でモノ的な存在とみなす。傍観者の観察から「どうすると、どうなるか」を「客観的」に調べ、そこから客観的法則を導出して説明する。

Reddy (1991, 2007, 2008) は研究者としてではなく、母親として自分の子どもと接する中で、発達心理学で知られている知見よりも早期から子どもに共同注視やからかいなどが出現することに気が付き、その理由として、これまでの研究は三人称的に行われていたことを指摘している。そのうえで、

人とのかかわりにおける心の理解といった社会的認知の発達過程を理解するためには、二人称的かかわりからはじめなければならないと主張している。この主張に対して、母親のような存在しか実験者になれないことや、実験の再現性が極めて低いといった問題点も考えられる。しかしながら、Reddyの考えは、二人称的な視点から捉えることで、これまでの三人称的な研究では得られない知見が得られる可能性を含んでいるように思われる。したがって、二人称的アプローチ（二人称的にかかわることからはじめること）は方法論が確立していないものの、保育者と乳幼児のかかわりを捉える視点になりうると考えられる。そこで、本研究ではReddyによる人称的かかわりを基にして保育者と乳幼児のかかわりを記述する様相モデルを提案したい。なお、本研究では一人称的かかわりから三人称的かかわりまでを総称して「人称的かかわり」とよぶことにする。

研究の方法は、はじめに先行研究として、レディ（2015）による「二人称的かかわり」、及び、二人称的かかわりと類似した考え方の「ドーナツ論」（佐伯, 2017）を概観する。佐伯は、ある時、大学の同僚からドーナツ論と類似の考え方としてReddyの二人称的アプローチを紹介されたという。このことから、ドーナツ論と二人称的アプローチは別々に考えられているが、保育者と乳幼児のかかわりを捉えるための類似した視点である。次に、保育者と乳幼児のかかわりを記述する様相モデルを提案する。

2 佐伯の「ドーナツ論」

(1) 人やモノをケアする

保育者と乳幼児のかかわりに関する先行研究として「ドーナツ論」を概観する。佐伯（2017）は、保育という営みは一般に「子どもをケアすること」とされているとしたうえで、保育は子どもをケアするのではなく、「子どもがケアしている世界」をケアすることであると述べている。その前提には乳幼児から老人までのすべての人は誰かをケアしないではいられない存在であるという考え方があり、その理由として、自分以外の誰かをよく生かそうとすることが、結果として自分がよく生きることになるからであるという。さらに、大人になると「ケアする心」は喪失してしまうが、乳幼児は誰かをケアしないではいられない存在であるともいっている。実際、乳幼児を含む子どもが、そのような気質をもっていることは実験により明らかにされている（Hamilin & Wynn, 2011）。

「子どもがケアする世界」をケアするために、保育者に要請されることとして、佐伯は「子どもが世界をどのようにケアしているか、なぜそのようにケアしないではいられないのかなどについて、保育者は丁寧に注意深く見て、理解する（わかる、納得する）必要があるでしょう」と述べている。そのために保育者は子どもを「保育者が想定する望ましい姿」になるように働きかけるということを一且控え、子どもが何をどのように、なぜケアしようとしているのかを子どもに聴く姿勢が重要であると説いている。さらに、子どもの声（訴え）を聴き取ったならば、それに応える必要性を自らの中を感じるはずであり、応答することがさらによく生きることへの提案なのだという（佐伯 2017, 6-13）。

また、佐伯は、人（乳幼児を含む）がケアするのは人だけではなく、モノもケアする対象であるとする。子どもが遊ぶときは、何等かのモノとかかわることになり、その場合、子どもはモノをケアするからである。子どもがモノと専心没頭してかかわるとき、それはモノにどのようにすればモノはどうなるかを聴いているのである。例えば、円柱の形をしたビスケットの空き缶に対して、ある向きから押し出すと転がる。また、棒で空き缶を叩くと大きな音が出る。このように、モノと関わろうとす

る子ども達の志向性に応じて、かかわり方についての特定の行為を誘発することになる。これは、ギブソンの生態学的視覚論でいうところのアフォーダンスを抽出しているといえる。そして、乳幼児がモノに馴染むと、今度は社会や文化に向けての実践が行われるようになる。例えば、上述したビスケットの空き缶の場合、棒で叩いてうまく大きな音が出せるようになると、今度はそれをまわりの大人に見せびらかしたくなるというのが、実践世界への参入を意味する。乳幼児の「立ち」や「(手を)パチパチさせる」ことも同様である(佐伯 2017, 15-19)。

以上のように、乳幼児はモノやコトとの応答関係を通してモノやコトと馴染み、モノやコトを通して実践世界へ参入するようになる。

(2) ドーナツ論

佐伯(2017)は、ヒトが「なじむ」モノやコトを媒介として、社会や文化に実践を広げようとする過程を「ドーナツ論」という見方で説明している。ドーナツ論では、ワタシ(I)は最初、アナタ(YOU)と応答関係を繰り返しながら親しくなる。やがて、ワタシはアナタとの関係を延長して社会(THEY)と関わるようになっていくとする。この様相は図1のモデルを用いて説明される。

ワタシ(I)が外界の実践世界と関わるようになるにはアナタ(YOU)的存在との出会い(第一接面)

があり親しくなじむまで応答関係がある。ここで乳幼児(I)にとってYOU的存在は母親だけとは限らず、モノの場合もある。例えば玩具の笛でもよい。この場合、笛との応答関係は笛を吹くだけではなく、笛を手を持って触ってみる、笛を投げてみるなども含まれる。応答関係により親しく馴染んできたなら、それまでのYOU的かかわりを外界のモノ・ヒト・コトに「延長」して文化的実践(THEY)と出会う(第二接面)。例えば、笛であれば近くにいる人(THEY)に笛を吹かせて見せびらかすまでになる。

この「ドーナツ論」において、佐伯はYOU的他者・YOU的道具の介在がない場合は、IにTHEY(外界)がむき出しになって迫ってくることになり、世の中の規範や要請を突きつけることになるといい、これを「むき出しのTHEY (bare-directive THEY)」とよんでいる。それに対して、YOU的他者・YOU的道具の介在があることにより親しむことができ、共に様々な実践が生み出されるTHEYのことを「同伴的THEY (partner-like THEY)」とよび、人の学習や発達には同伴的THEYとのかかわりが大切であり、そのためにはYOU的他者・YOU的道具の介在が不可欠であり重要な役割を果たしていると指摘している(佐伯 2017, 19-21)。

(3) ドーナツ論の例 ～新生児模倣～

佐伯(2017)は、乳幼児が生後すぐに出会うヒトをYOU的他者としてかかわろうとすることを、新生児模倣の例(新生児が大人の「舌出し」を模倣する)を用いて示している。「舌出し」は、大人が新生児に向けて舌を出してみせると、新生児はそれをじっとみつめ、口をもごもごさせた後、舌を出すことである。この舌出しについて、以下の手順にしたがって実験を行なっている。

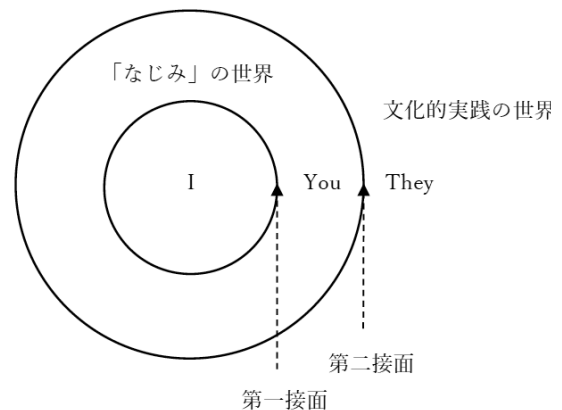


図1. ドーナツ論(佐伯, 2017)

- 1) モデルの舌出しと赤ちゃんの模倣ということを数回繰り返した後、
- 2) モデルは舌出しをしないで赤ちゃんをただニコニコ見つめる。
- 3) 赤ちゃんはしばらくモデルの顔をじっとみつめています、しばらくすると今度は自分から舌出しをはじめ（誘発的舌出し）。

この実験において、大人の舌出しを模倣しているとき、新生児の心拍数は上がっている。自分から舌出しをしようと努力しているからである。ところが、大人が舌出しをしないで新生児の顔をじっとみつめているときは、新生児は大人の舌出しを期待しており、心拍数が定常状態よりも低下する。最後に心拍数をあげて自ら舌出しをするという。

生後間もない新生児も、目の前のヒトとの舌出し行為はYOU的交流であり、ドーナツ論でいう「第一接面」のかかわりである。これは「対話」であり、「対話の順番取り」を期待している。「対話の順番取り」は発達心理学では通常三歳を超えてから現れるとされているが、新生児が生後すぐに出会うヒトをYOU的他者とみてかかわろうとすることを示す例である（佐伯 2017, 21-25）。

3 Vasudevi Reddyの「人称的かかわり」

(1) 自らの子育て経験からの気づき

Reddyは乳幼児の発達研究を行い、大学でも発達心理学の授業を行ってきたが、自ら出産し、わが子（乳幼児）と親しくかかわってみて驚いたという（佐伯 2017, p.34）。これまでの発達心理学のテキストにおいて、乳幼児は生後二カ月から三カ月になるまでは他人とのかかわりがわからない、三～四歳になるまでは他人の心を自分と違うものとは理解できないとされていたことが、母親としてみると、生後間もなくから、こちらからの微笑みに応えるし、一歳くらいでもヒトの心を見透かして、面白がらせたり、わざとふざけたりするなど、人間らしいことを行っているとReddyは指摘する（表1）。

表1. 注目への気づきの発達：二人称モデル（レディ, 2017, p.15）

月齢	何に向けての注目が 気づかれるか…	注目的かかわりの例
0～4	自己	喜び、照れ微笑、嘆き、不在／非注目の際の“呼び寄せ”
3～6	身体部位	くすぐりの接近、乳幼児の体への唄あやし、それら継続／ 増強の要求
6～10	自己による行為	指示に従う、おどける、からかう、見せびらかす
9～12	空間にあるモノ	外部にある対象への指差し、視線追従
12～24	時間軸上の事物	過去／現在／未来の注目についての識別

さらに生後二カ月以後になると、抱き上げようとした際、身体接触以前に脚伸ばしや腕広げなどの予期的調整を行うことを示した（Reddy et al., 2013）。その実験では、母親が乳幼児に話しかけ、腕を伸ばして、抱き上げるという行為をそれぞれ「おしゃべり」、「接近」、「接触」（接触は母親と触れた後を示す期間を示す）として、月齢に応じた乳幼児の反応を調べている。その結果、すべての月齢で接近から接触までの間に予期的調整が増加していることを明らかにしている。

そこで、Reddyは、何故心理学は乳幼児の人間らしい応答を見逃してきたかを考えた。その結果、心理学は研究対象である人間を、モノを観察するような、傍観者的な眼差しでみてきたからであろう

と述べている（佐伯 2017, p.35）。

（2）3種類のかかわり

レディ（2015）は、心理学が乳幼児の人間らしい応答を見逃してきた理由を、根本的なところでは Descartes の心身二元論にあるとし、心理学が乳幼児をモノのように観察し、モノのように反応させて、そのモノの特性を、自分と切り離して理論付けてきたことにあると指摘する。ところが、わが子をみる母親は、乳幼児をはじめから「対話の相手」として名前をよび、それに対する反応は反射行動ではなく、母親の働きかけへの応答（二人称的かかわり）であるという。一方、乳幼児の側でも観察者がかかわる場合には個人的かかわりをもたない、もてない他者（三人称的他者）だが、母親としてかかわる場合には、乳幼児の側でも個人的かかわりをもつ他者とみなして、個人的関係をつくろうとしているという。それによって、母と子は互いに二人称的な関係の中で相手を理解し、相手とかかわっているとしている。以上を踏まえて、Reddy は、人とかかわる場合には一人称的かかわりから三人称的かかわりまでの三つのかかわり方があり、乳幼児の社会的認知がどのように発達するのか理解するためには「二人称的かかわり」の理解が必要で、そこから始めなければならないと主張しているのである（レディ, 2017）。ここで「二人称的かかわり」だけが社会的認知の理解を得る手段であるという意味ではないこと、「二人称的かかわり」でなければ発達を理解できないという意味ではないことにも注意しなければならない。

（3）一人称的かかわり

一人称的かかわりは、かかわる相手がかかわろうとする本人と同じような思いや情感をもっていることとみなすことが前提にあるかかわりである。この前提のもとで、自分の思いや情感を相手に投影するかかわりである。例えば、自由遊びの時間において、数人で遊んでいる子どもたちのところに保育者がいるとする。少し離れたところから、その保育者をじっと見つめる子どもがいた場合、保育者は「こっちへきて一緒に遊ぼう」と声かけするかもしれない。それは、「私だったら一緒に遊びたいと思う。だからきっと一緒に遊びたいと思っているはず」と考えることが一人称的かかわりである。この場合、子どもは保育者に別の内容で支援要請をしている可能性もある。

佐伯（2017）によれば、一人称的かかわりは「同感的かかわり」であるという。佐伯は「同感」を「自分自身の経験やそのときふとわき起こる思い、情感をそのまま、ストレートに、相手にあてはめる（投影すること）」とし、「共感」を「相手の見ているモノ・コトを、相手の立場と視点からみて、相手の「ふるまい」が自分自身「そうしないではいられない」という思いで、思わず、自分もそのように「ふるまいそうになる」（実際に「そうふるまう」とはかぎらない）こと」としている。この解釈によれば、一人称的かかわりは、相手がどのように感じているかを正確に理解することが要請されず、自分自身の過去の経験などから「私も～と思ったことがある」という同感するかかわりになる。

（4）三人称的かかわり

三人称的かかわりは、かかわる相手はかかわっている本人とは直接の関係を一切持たず、傍観者としてみているというかかわりである。心理学研究では、子どもの行為を離れたところから観察することや、実験における反応を測定する。この場合、子どもの思いや情感には関与することはなく、子どもが

面白そうにしていたり、つまらなそうにしていたりといったような情感を表出していても、実験する側は観察すべき反応が出現したか否かのみ関心を示し、子どもの情感などのノイズは無視される。

したがって、レディ（2017）も指摘するように、心理学は研究対象である人間を傍観者の眼差しでみてきたことになる。このことから、心理学は研究対象である人間と三人称的にかかわってきたといえる。

（5）二人称的かかわり

二人称的かかわりは、対象を「ワタシ」と切り離さない、個人的関係にあるものとして、親密にかかわる存在とみなすことである。対象と情動を伴ったかかわりを持ち、対象は固有の名前をもつとし、対象自身が「どのようにあろうとしているか」を聴き取ろうとすることである。このようなかかわりは、単に他者に注意を向けたり、他者に向かって指示したりすることではなく、相互的関与であるといえる。

佐伯（2017）によれば、二人称的かかわりとは「共感的かかわり」であるという。子どもが砂場や滑り台で遊んでいるときに、保育者も同じように楽しくなって一緒に遊ぶことが共感的かかわりであるかどうかを判断することは難しいが、他者の苦しみを慮ることが「共感」の原点にあるという。例えば、砂場や滑り台で一部の子ども達と一緒に遊んでいる保育者を、離れたところから寂し気な眼差しでみている子どもが「自分にはかまってもらえない」ことの寂しさをかみしめていることに慮る思いがあるかどうかであると佐伯は述べている。

Reddyは大人が子どもとかかわるときは、まず「二人称的かかわり」からはじめるべきであると主張している。このことは、保育者が乳幼児とかかわる場合にもいえる。したがって、保育者が乳幼児に対して二人称的眼差しを向け、二人称的にかかわることによってのみ見えてくる世界があるはずである。このように、二人称的に保育者と乳幼児がかかわるような保育実践は、互いに応答し、共感しつつ、相手を深く知ろうとする営みともいえる。

4 保育者と乳幼児のかかわりを記述するモデル

Reddyは乳幼児とのかかわり方を一人称的かかわりから三人称的かかわりの3種類に分類しているが、それは、これまでに見過ごされがちであった二人称的かかわりを説明するために便宜的に分類したに過ぎない。しかしながら、本研究では、Reddyによる人称的かかわりを保育者と乳幼児のかかわり方を記述することに用いることはできないかと考えた。

Reddyは3種類のかかわりを「一人称的」「二人称的」「三人称的」とよんでいるが、それらの間に何等かの水準があるのではなく、また、非連続的に捉えられてしまう。しかしながら、例えば、二人称と三人称の間のかかわりも考えられるのではないかという意見がある。Reddyが中山人間科学振興財団25周年記念事業のシンポジウムにおいて講演を行ったとき、司会の佐伯胖氏とパネリストの下条信輔氏から、Reddyが自説を説明する際に用いた動画は、それ自体がカメラという三人称的な視点であり、厳密には二人称ではなく、二人称と三人称を行き来する「2.5人称的アプローチ」なのではないかとコメントしている（レディ, 2017）。「2.5人称的アプローチ」をさらに柔軟に捉え、保育者と乳幼児のかかわりが連続的であり力動的であると考えてみる。つまり、二人称的かかわりだけでも、やや三人称的かかわりの部分もある場合や保育者と乳幼児とのかかわりが時間の経過の中で変化

する場合もあるのではないかと考える。

そのような考えに基づいて、本研究では保育者と乳幼児の3種類のかかわり方を連続的、かつ力動的に捉えることができるように、図2に示すモデルを提案したい。

図2は、円の内部に一人称的かかわりから三人称的かかわりの3種類のかかわりを図2に示すように位置づけたものである。図2の二人称的かかわりと三人称的かかわりの中点付近は2.5人称的かかわりを意味する。さらに保育者と乳幼児のあるかかわりの場面において保育者を「▲」、乳幼児を「●」で表して、両者のかかわりを「▲」と「●」を交互に連結して表現することにする。ここで、ある保育者（保育歴3年、女性）による自身の保育の振返りを例にとり説明する。

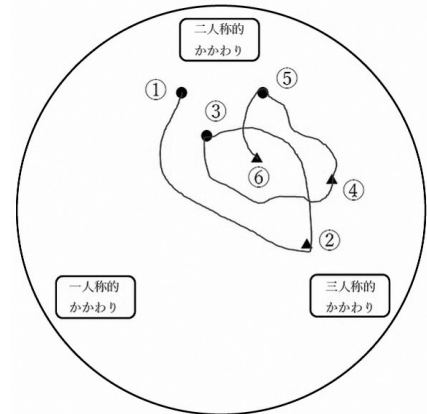


図2. 保育者と乳幼児のかかわり方

保育者H（保育歴3年）による振返り（男児S，2歳10ヵ月）

園庭における自由遊びの後、給食のために保育室に戻った時のことである。Hは給食の準備に取りかかろうとしていた。子どもたちは保育者の声かけにより馴れた手順で手洗い、うがいをを行い次々と席に着いた。「いただきます」をして子どもたちは給食を食べ始めた。ところが、Sは給食を食べようとしなかった。そこで、Hは「おなかすいたでしょう」「今日はS君の好きな卵焼きだね」などと声をかけた。しかし、Sは下を向いたままであったため、Sのことが気になりながらもHは他の子どもに対応していた。しばらくするとSは自分から食べ始めた。HはSの隣に座り「今日は何をして遊んだの?」「先生はダンゴムシを捕まえたよ」「もっといっぱい遊びたかったね」などと給食とは関係ない話を始めた。するとSがそれに答えるように「僕はね、大きなトンネル作ったんだ」「お友達ともっともっと高い山作ってそこにトンネルつくろうって…」と話し出し、徐々に表情が明るくなっていった。

保育者Hによる振返りの記述を次のように整理する。

- ①S：給食を食べようとしなかった
- ②H：「おなかすいたでしょう」と声をかけた
- ③S：下を向いたままであった
- ④H：他の子どもに対応していた
- ⑤S：しばらくすると自分から食べ始めた
- ⑥H：「もっといっぱい遊びたかったね」

①は、Sが給食を食べようとしなかった場面である。このような態度により、Sは何かを訴えかけようとしていたと考えられるが、HはSが給食を食べていないという事実から②のように対応している。この段階ではSに応答することなく給食をたべさせようとしていることから、三人称的かかわりであると考えられる。さらに、Hの声かけに対してSは③において「下を向いたまま」になることで、何かを訴えかけていたと考えられる。④においてHはSのことが気になりながらも他の子どもに対応している。これは、最初の②よりもSの態度を気にしていることから、Sの訴えを読み取ろうとする気持ちであることが伺える。したがって、②よりは二人称的かかわりに近づいていると考えられる。

その後、自分から食べ始めたSに対して、⑥において「もっといっぱい遊びたかったね」と声かけし、それが切掛けとなり、SはHに自分の訴えを声に出すことができたと思われる。Hによる⑥の声かけは三人称的かかわりでもなく、「自分だったらもっと遊びたかったからきっとSも遊びたかったのだろう」という一人称的かかわりでもない。Sの表情や情動から「もっと遊びたかった」というSの訴えに応答したのである。したがって、⑥は④よりも二人称的かかわりに近づいているが、Sの表情や情動から、Sの訴えを読み取って応答したかどうかまではわからないことから、二人称的かかわりであるとはいいきれない。したがって、⑥は二人称的かかわりと三人称的かかわりの中間にある2.5人称的かかわりの位置にあると考えられる。

図2には、この一連のかかわりの様相を記述した。これまで保育に関する多くの論文や本では、乳幼児の様子を捉え、表現する場合、時系列に沿って文章で記述されることが多かったが、それだけでは人称的かかわりのうち、どのかかわり方が生起しているのか、わかりやすく捉えることはできない。一方、本研究で提案するモデルは、上述した例が示すように、保育者と乳幼児のかかわり方を時系列に沿って表現するだけでなく、人称的かかわりの視座から、かかわりの様子を連続的、力動的に捉えることができるとされる。

岩田(2018)は「二人称的アプローチ」は、保育実践の「二人称的かかわり」の当事者だけではなく、保育実践を理解しようとエピソードを書く「書き手」と、保育実践を理解しようとエピソードを読む「読み手」も含んだ営みである。」と述べている。したがって、二人称的にかかわる保育実践を書き手や読み手にとってわかりやすくする必要があり、それを何等かの形で視覚的に捉えようとしたのが、本研究で提案したモデルである。このモデルを用いる場合、書き手、読み手の双方が、人称的かかわりを理解する必要があることから、誰でもすぐに使えるわけではない。しかしながら、二人称的かかわりをエピソードだけではなく、視覚的な補助もあることで、より多面的に保育者と乳幼児のかかわりをとらえることが期待できると考える。

5 おわりに

本研究ではReddyによる人称的かかわりをもとにして保育者と乳幼児とのかかわり方を記述する様相モデルを提案した。そのモデルでは、保育者と乳幼児の3種類のかかわり方を連続的かつ力動的に捉えようとしたところに本研究の独自性がある。このことにより、保育者と乳幼児のかかわり方を視覚的に捉えることができると期待できる。今後は、本モデルの有効性、妥当性を検証しながら、モデルの修正を行うことにする。

【引用文献】

- Hamilin, J.K., & Wynn, K., Young infants prefer prosocial to antisocial others. *Cognitive Development*, 26 (1), 2011.
- 原口喜充, 日々の保育における担任保育者の保育体験—保育者の主観的体験に注目して—, *保育学研究*, 54 (1), 2016.
- 岩田恵子, 保育実践への「二人称的アプローチ」, *保育学研究*, 58 (3), pp.233-235, 2018.
- 厚生労働省, 『平成29年告示保育所保育指針』, チャイルド本社, 2017.
- 森下剛・佐々木郁子, 保育学生の保護者対応不安に関する研究, *国際学院埼玉短期大学研究紀要*, 39, 2017.
- 永瀬伸子ほか, 東京都の保育改革と現場の声: 保育者さんに聞く (1) 変わる親子関係, 変わる労働現場, 生活社

保育者と乳幼児のかかわり方を記述する様相モデルの提案

会科学研究, 11, pp.73-85, 2004.

大宮勇雄, 『保育の質を高める—21世紀の保育観・保育条件・専門性』, ひとなる書房, 2006.

Reddy, V., Playing with others' expectations: Teasing and mucking about in the first year. In: Whiten A ed. *Natural Theories of Mind*. Oxford: Blackwell, pp.143-158, 1991.

Reddy, V., Getting back to the rough ground: deception and 'social living'. *Philosophical transactions of The Royal Society of London. Series B, Biological Science*, 362 (1480), pp.621-637, 2007.

Reddy, V., Chapter Nine. *Mind knowledge in the first year: Understanding attention and intention*. *Blackwell Handbook of Infant Development*. John Wiley & Sons, p.241, 2008.

Reddy, V., et al., The emergent practice of infant compliance : An exploration in two cultures, *Developmental Psychology*, 49 (9), pp.24-29, 2013.

佐伯胖, 二人称的アプローチ入門, 『「子どもがケアする世界」をケアする』(佐伯胖編著), ミネルヴァ書房, 2017.

ヴァスデヴィ・レディ (佐伯胖訳), 『驚くべき乳幼児の心の世界—「二人称アプローチ」から見えてくること—』(原書: *How Infants Know Minds*), ミネルヴァ書房, 2015.

ヴァスデヴィ・レディほか, 『発達心理学の新しいパラダイム 人間科学の「二人称的アプローチ」』, 中山人間科学振興財団, 中山書店, 2017.

山村けい子, 「保育所における育者の困難感、保育者の保育困難感の軽減と保育力の向上—保育者支援のあり方をめぐって—」, 教育心理学会第57回総会資料, 2015.